**様式 C-19**

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 10 日現在

**研究種目：基盤研究（C）**
**研究期間：2007～2008**
**課題番号：19520715**
**研究課題名（和文）　人類社会進化論の再構築−霊長類と人間社会の構造論的架橋**
**研究課題名（英文）　Reconstruction of evolutionary perspective of human society: Making a structural bridge between primates and human society**

**研究代表者**
**寺嶋　秀明（TERASHIMA HIDEAKI）**
**神戸学院大学・人文学部・教授**
**研究者番号：10135098**

研究成果の概要：
20 世紀の後半において大きく発展した霊長類社会学の知見と，生態人類学／文化人類学の研究成果を集結し，ヒト以前の社会から人類社会への進化の筋道について，構造論的な視点から研究を進め，社会進化のあり得べき姿の抽出と人間性の本質の把握を目指した。2 年間で合計 8 回の共同研究を開催し，3 つの課題，(1) 資源および互酬システムの進化の究明，(2) コミュニケーションおよび相互行為システムの進化の究明，(3) 共同性と規則・制度の進化の究明について学際的な議論を行い，停滞していた社会進化論の新展開を行った。

交付額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ２００７年度 | 1,800,000 | 540,000 | 2,340,000 |
| ２００８年度 | 1,700,000 | 510,000 | 2,210,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 3,500,000 | 1,050,000 | 4,550,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学
キーワード：社会進化，文化人類学，生態人類学，霊長類学，社会構造，コミュニケーション，制度

## １．研究開始当初の背景

ヒト以前の社会から現在の人類社会への進化プロセスの解明は，人間社会の特質を明らかにし，人間性の本質を把握する上でも，きわめてたいせつな課題である。そのためには，人間社会や進化に関わる諸学問の緊密な連携が必要なことは言うまでもない。しかしこれまで文化人類学は進化の問題を避けてきており，また霊長類学は生物学的枠組みにとどまり，人間の社会進化をめぐる学際的な連携の試みはきわめて不十分であった。

## ２．研究の目的

本研究は，上記のような閉塞的状況を打破し，世界的にトップレベルにある日本の霊長類社会学と生態人類学／文化人類学のコラボレーションによって人類社会進化論の新展開を図った。とくに究明すべき課題として (1) 資源および互酬システムの進化の究明，(2) コミュニケーションおよび相互行為システムの進化の究明，(3) 共同性と規則・制度の進化の究明という三つの課題を掲げた。方法論的には，ヒト以前と人社会にとの機能的な連関を探るのではなく，両者の構造論的な連続と非

連続を明らかにし，論理的な観点から進化について考察することを目的とした。

３．研究の方法
基本的に個人別の研究を進める一方，共同研究会方式で個別研究の発表とそれについてのディスカッションという形で全体の統合を図った。初年度に 4 回，次年度に 4 回，合計 8 回の共同研究会を開催し，延べ 25 人がプレゼンテーションを行ったあと，徹底的なディスカッションを行った。各回毎に上記の研究課題の一つを主たるテーマとして掲げ，霊長類学，生態人類学，文化人類学の領域から一人ずつ発表を行い，学際的な議論を展開した。毎回の研究会の記録はテープ起こしをして文章化し，次回の議論の基盤とした。

４．研究成果
以下のとおり，合計 8 回の共同研究会を開催し，発表とディスカッションを行った。
第１回（2007 年 6 月 9 日）「霊長類と人間社会の架橋はいかにして可能か？」
1. 寺嶋秀明「方法論としての imaginary evolution」
2. 早木仁成『“許す／許さぬ”の複雑性，制度論への視座，遊びのルール・毛づくろいの協調，他者への同調」
第２回（2007 年 7 月 28 日～29 日）「資源および互酬システムの進化の究明」
１．寺嶋秀明「社会進化」の微分と積分
２．小松かおり「人間の食の過剰性」
３．黒田末寿「自然制度という矛盾の中へ」
４．内堀基光「社会集団はいかなる意味で進化するか」
第３回（2008 年 2 月 2 日～ 3 日）「コミュニケーションおよび相互行為システムの進化の究明」
１．早木仁成「人間の同調能力，サルの音声・人の言語，パントフート」
２．中村美知夫「『接触』という相互行為」
３．木村大治「現生人類における言語的インタラクションの多様性 ― 熱帯アフリカからの二つの事例」
４．山極寿一「暴力の起源」
第４回（2008 年 3 月 17 日～ 18 日）「共同性と規則・制度の進化の究明」
１．北村光二「チンパンジーの食物分配をどのように考えればよいのか」
２．河合香吏「東アフリカ牧畜民 ― ドドスとトゥルカナ，レイディング，非構造」
３．川村清志『“サルと伊谷とエヴァンゲリオン”という発表を目指していた過程についての断章」
第 5 回（2008 年 6 月 14 日～ 15 日）「資源および互酬システムの進化の究明」
１．寺嶋秀明「平等性の進化とサルからヒトへの社会進化」
２．小松かおり「雑食性と多様性をめぐって」
３．黒田末寿「サルの行動の意図性を読む―抑制／社会的抑制／自己抑制」
４．内堀基光「「ヒトに見られる互酬性と交換」を進化の観点から考える」
第 6 回（2008 年 3 月 17 日～ 18 日）「コミュニケーションおよび相互行為システムの進化の究明」
１．中村美知夫「チンパンジーのメスの社会性」
２．木村大治「似たようなものたちが向かい合う」
３．川村清志「芸する身体 ―大蔵谷獅子舞のフィールドワークから」
第 7 回（2008 年 3 月 17 日～ 18 日）「共同性と規則・制度の進化の究明」
１．河合香吏「共同性と規則・制度の進化の究明」
２．北村光二「「表象」とはなにか」
３．寺嶋秀明「霊長類から人への社会進化と「性」の問題，および相称的行動について」
第 8 回（2009 年 2 月 28 日～ 1 日）「平等性と社会進化」
１．山極寿一「ゴリラの単雄群と複雄群に見られる対等性と社会の可塑性」
２．鈴木滋　「不平等原則再考―マカク属のサルの社会構造の安定性」
以下，その成果の概要である。
(1) 霊長類から人への社会進化における全体を通した方法論については，これまでの社会進化論の欠陥と限界を認識した上で，機能的連続性を求めるような議論ではなく，論理的連続性を基盤とした進化の見方が必要なことが確認された。その一つとして，霊長類と人に共通する社会的問題について，その対応において一方が過剰でもう一方が過少というような対比がある場合には，その連続性と不連続について徹底的な解析を行い（微分），その不連続を埋めるようなイマジナリーな進化を構築する（積分）という方法論を提出した。
(2)「資源および互酬システムの進化の究明」については，社会における「資源」のあり方と互酬／交換システムの根源的関係について議論を展開し，交換における時間と価値との変換関係や，平等性を軸とした社会進化の動因などについて議論を深めた。
(3) 「コミュニケーションおよび相互行為システムの進化の究明」では，言語を中心としたコミュニケーションの他に，接触によるコミュニケーション，身体動作によるコミュニケーション，相互作用の理解可能性などを検討し，同調能力や他者理解という根源的能力の進化について議論を深めた。
(4) 「共同性と規則・制度の進化の究明」では，食物分配をめぐる規則的行動の進化や，霊長類と人間社会をつなぐ自然制度のなど

について検討し，霊長類社会と人類社会における「社会性 sociality」 の基盤の問い直しを行った。
　現在，以下の諸論考を含む報告書をまとめているところである。
寺嶋秀明「共存戦略と社会性（個と群れとの関係）の進化について」
内堀基光「互酬性と交換―進化を視野に入れた試論」
黒田末寿「『人間平等起源』における平等原則の系譜」
山極寿一「ゴリラの単雄群と複雄群に見られる対等性と社会の可塑性」
北村光二「循環的決定過程と自己言及的活動」
木村大治 「似たようなものたちが向かい合う」
小松かおり「人間の食の過剰性」
川村清志「民族芸能の習得と実演における言葉と身体，そして意識についての断章」
中村美知夫「『接触』という相互行為―原初的対称性から考える社会性の進化」

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 21 件）

寺嶋秀明「伊谷純一郎の「人間平等起原論」をめぐって」『人間文化』（神戸学院大学人文学会誌）（査読あり）23 巻，1-12 頁，2008 年

内堀基光「中等教育における文化人類学：地歴科との関連に焦点を当てて」『学術の動向』（査読なし）2008 年 10 月号，pp.36-39、日本学術会議，2008 年

黒田末寿「生態的参与観察--霊長類学と人類学を架橋する方法」フィールドプラス（査読なし），no.1：18-19、東京外国語大学 AA 研，2009 年

黒田末寿「火と牛が作った風景：高島市椋川のホトラ山」『人間文化』（査読なし）（滋賀県立大人間文化学部紀要） 21: 12-18，2007 年

北村光二「コミュニケーションの生態学に向けて（2)」『岡山大学文学部紀要』（査読なし）49: 1-11，2008 年

北村光二 2008 「社会的なるもの」とはなにか？：他者 との関係づけにおける「決定不可能性」と「創造的対処」 『霊長類研究』（査読あり）24： 109-120.

Yamagiwa, J. (2008). Comments on “The Chimpanzee Has No Clothes: a critical examination of Pan troglodytes in models of human evolution.” Current Anthropology, 49: 105-106. （査読なし）

Yamagiwa, J., Basabose, A.K., Kaleme, K.P., Yumoyo, T. (2008). Phenology of fruits consumed by a sympatric population of gorillas and chimpanzees in Kahuzi-Biega National Park, Democratic Republic of Congo. African Study Monographs Supplementary Issue, 39: 3-22. （査読あり）

Yamagiwa, J. (2008). History and present scope of field studies on Macaca fuscata yakui at Yakushima Island, Japan. International J. Primatology, 29: 49-64. （査読あり）

山極寿一「日本の霊長類学を創った人々」『大航海』（査読なし）64: 146-150，2007年

早木仁成「映像をもちいた地域との連携について―人類学的な課題を通じて」（共著:岩谷・寺嶋・早木・五十嵐）『人間文化』（査読あり）（神戸学院大学人文学会）22: 37-49，2007年

木村大治 「どのように〈共に在る〉のか―双対図式からみた『共在感覚』」『談』（査読なし）81号，11-37頁，たばこ総合研究センター，2008年（査読なし）

木村大治 2008 「コンゴ民主共和国ワンバにおけるティラピア養殖と小家畜飼養の試み」日本アフリカ学会第45回学術大会予稿集 p.43。（査読なし）

木村大治 2008 「インタラクションの境界と接続」電子情報通信学会技術研究報告（ヒューマンコミュニケーション基礎）HCS2008-45 pp.1-6. （査読あり）

小松かおり「バナナの商品化と品種多様性―インドネシア・南スラウェシ の事例から」山本紀夫編『国立民族学博物館調査報告84巻 ドメスティケーションその民族生物学的研究』（査読あり）国立民族学博物館，（ページ未定）2009年

川村清志「琴―近代日本クリスチャン女性の半生(3)」『比較文化論叢』（査読あり）22:93-119，2008年

川村清志「琴―近代日本クリスチャン女性の半生(1)」『比較文化論叢』（査読あり）20:5-63，2007年

中村美知夫「霊長類の文化」『霊長類研究』印刷中，2009．（査読あり）

Nakamura M (2009) Interaction studies in Japanese primatology: their scope, uniqueness, and the future. Primates published online, doi: 10.1007/s10329-009-0133-6．（査読なし）

中村美知夫，田代靖子，伊藤詞子「社会の学としての霊長類学：特集の趣旨説明」『霊長類研究』24:69-71，2008年。（査読あり）

中村美知夫「社会の学としての霊長類学」(田代靖子,伊藤詞子と共著）『霊長類研究』（査読あり）23:133，2007年（査読あり）

〔学会発表〕（計　４件）
寺嶋秀明「平等性の進化とサルからヒトへの社会進化」第24回日本霊長類学会自由集会，2008年７月４日，明治学院大学

中村美知夫，2008．「チンパンジーは本当に暴力的か？ ―競争原理と霊長類の社会―」『日本人類学会・進化人類学分科会第 21 回シンポジウム「霊長類の暴力とその解決法の進化」』京都府京都市京都大学理学研究科．2008 年６月．

Nakamura M, 2008. Behavioral differences between neighboring groups of chimpanzees at Mahale. On Human Nature: Symposium of Comparative Cognitive Science. Kyoto, Japan, May. 2008.

Itoh N, Nakamura M, Ihobe H, Nishida T, 2009. Long-term changes in the social and natural environments surrounding the chimpanzees of the Mahale Mts. National Park. Conference on Long Term Changes in Protected Areas of the Albertine Rift, Kampala, Uganda, Jan. 2009.

〔図書〕（計１３件）
寺嶋秀明「からだの資源性とその拡張―生態人類学的考察」菅原和孝編『身体資源の共有（資源人類学９）』29～58頁，弘文堂，2007年

Terashima, H.,“The status of birds in the natural world of the Ituri forest hunter-gatherers.” In: E.Dounias et al. (eds.) Animal Symbolism: Animals, keystones in the relationship between Man and Nature? IRD Editions, Paris, pp. 191-206, 2008.

内堀基光 『文化人類学』共編（内堀基光・本多俊和）放送大学教育振興会，全219頁，2008年

内堀基光 『資源人類学（全９巻）』（共編，総合編者）弘文堂，全9巻（3140頁），2007年

山極寿一『人類進化論-霊長類学からの展開』，全187頁，裳華房，2008年

山極寿一『暴力はどこからきたか―人間性の起源を探る』NHKブックス，全244頁，2007年

山極寿一 「環境変動と人類の起源」池谷他編『アフリカⅠ』pp. 51-68，朝倉書店，2007年

山極寿一 「眠りの進化論」，高田公理・堀忠雄・重田真義編『睡眠文化を学ぶ人のために』，世界思想社，pp. 162-163，2008年

河合香吏「ドドスの腸占い―牧畜民の遊動に関わる情報と知識資源の形成をめぐって」C・ダニエルス編『知識資源の陰と陽（資源人類学３）』 pp.29-71，弘文堂，2007年

小松かおり『沖縄の市場〈マチグヮー〉文化誌』ボーダーインク，全204頁，2007年

小松かおり「バナナとキャッサバ―赤道アフリカの主食史」池谷和信・武内 進一・佐藤廉也編『朝倉世界地理講座―大地と人間の物語12―アフリカⅡ』朝倉書店，548-562頁，2008年

川村清志 「調査の終わりとハードボイルド・ライティングカルチャー」，李仁子ほか編『はじまりとしてのフィールドワーク―自分がひらく，世界がわかる』昭和堂 pp.281-314，2008年

中村美知夫『チンパンジー―ことばのない彼らが語ること』講談社新書，全239頁，2008年

６．研究組織
(1)研究代表者
寺嶋　秀明 (TERASHIMA HIDEAKI)
神戸学院大学・人文学部・教授
研究者番号：10135098

(2)研究分担者
内堀　基光 (UCHIBORI MOTOMITSU)
放送大学・教養学部・教授
研究者番号：30126726

黒田　末寿 (KURODA SUEHISA)
滋賀県立大学・人間文化学部・教授
研究者番号：80153419

北村　光二 (KITAMURA KOUJI)
岡山大学大学院・人文社会科学研究科・教授
研究者番号：20161490
山極　壽一 (YAMAGIWA JUICHI)
京都大学大学院・理学研究科・教授
研究者番号：60166600

早木　仁成 (HAYAKI HITOSHIGE)
神戸学院大学・人文学部・教授
研究者番号：60228559

木村　大治 (KIMURA DAIJI)
京都大学大学院・アジア・アフリカ地域研究
研究科・准教授
研究者番号：40242573

河合　香吏 (KAWAI KAORI)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化
研究所・准教授
研究者番号：50293585

小松　かおり (KOMATSU KAORI)
静岡大学・人文学部・准教授
研究者番号：30334949

川村　清志 (KAWAMURA KIYOSHI)
札幌大学・文化学部・准教授
研究者番号：20405624

中村　美知夫 (NAKAMURA MICHIO)
京都大学・野生生物研究センター・准教授
研究者番号：30322647